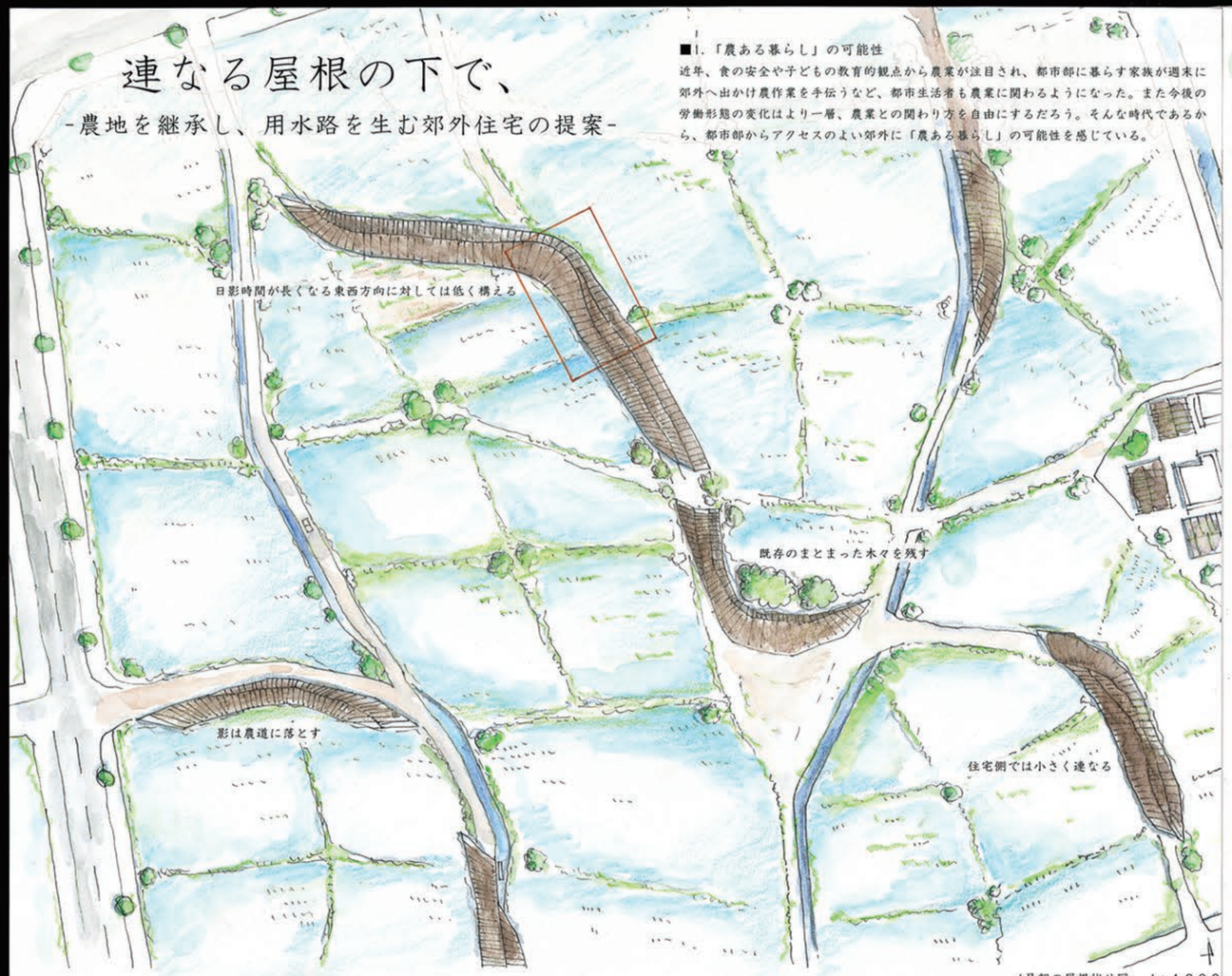
連なる屋根の下で、

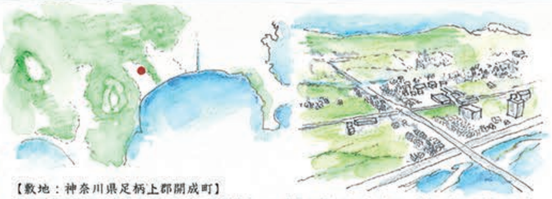
-農地を継承し、用水路を生む郊外住宅の提案-

■1.「農ある暮らし」の可能性

近年、食の安全や子どもの教育的観点から農業が注目され、都市部に暮らす家族が週末に郊外へ出かけ農作業を手伝うなど、都市生活者も農業に関わるようになった。また今後の労働形態の変化はより一層、農業との関わり方を自由にするだろう。そんな時代であるから、都市部からアクセスのよい郊外に「農ある暮らし」の可能性を感じている。



6月朝の屋根伏せ図　1：1000



【敷地：神奈川県足柄上郡開成町】
足柄平野に位置し豊富な水を生かした稲作中心の農業が行われてきたが、近年の宅地開発により農地は減少している。

6月朝の1階平面図　1：400

■2. 郊外住宅の立ち方の過渡期

郊外での「農ある暮らし」に可能性を感じている一方で、現代においても郊外のまとまった農地は「都市部へのアクセスが良い、自然にあふれた住宅街」をつくるために不健康に消費され続けている。

・同世代・同所得層家族が
・まちとの繋がりを持たないままに暮らし、
・数十年後には空き家だらけの高齢者のまちとなる。

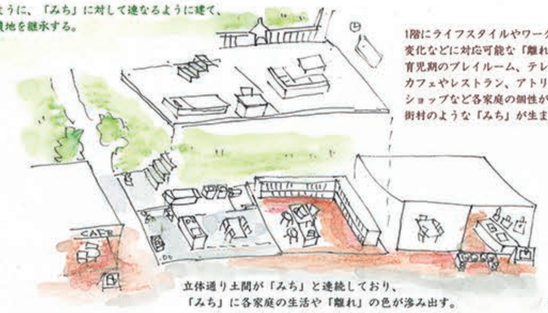
「郊外住宅の立ち方」は過渡期であると言えるのではないだろうか

↓

■3. 連なりつながる家の提案

多世代が「農ある暮らし」を送りながらまちとつながり、農地を継承してゆく住宅を提案する。
また、将来の人口減少に対して住宅は空き家となるのではなく、その時代の人々の考える価値あるものとして活かされる可能性を持ちえないだろうか。

路村のように、「みち」に対して連なるように建て、
背後に農地を継承する。

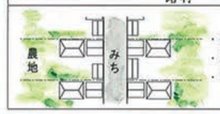
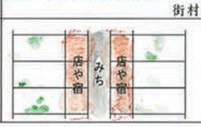


1階にライフスタイルやワークスタイルの変化などに対応可能な「離れ」を持つ。
育児期のプレイルーム、テレワークの仕事場、カフェやレストラン、アトリエや展示室、ショップなど各家庭の個性が並び、街村のような「みち」が生まれる。

立体通り土間が「みち」と連続しており、
「みち」に各家庭の生活や「離れ」の色が滲み出す。

ダイアグラム

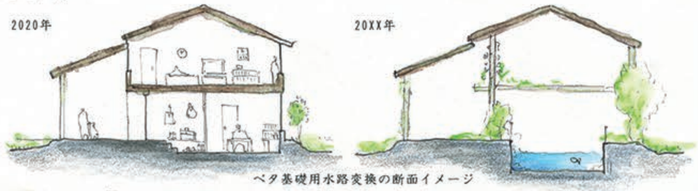
列村（宅地が運河や道路に沿って連なる形態）

路村	街村
	
・低密度に農家が並ぶ ・奥に農地を持つ ・離れを持つ	・家屋が高密度に並ぶ ・みちに面して店や宿が並ぶ（町屋）

「農ある暮らし」によってまちとつながるある一家の例

■4. 未来につながる連なるベタ基礎

人類の歴史古代四大文明に始まり、常に水と共にあった。農耕に限らず移動・運搬にも水は必要不可欠であり、現在では用水路から電力を得る小水力発電などの開発・研究もされている。また親水空間や観光、生活の中では打ち水など人を魅了したり癒すという使い方も見出してきた。
人口減少に対して空き家が増えたとき、連なるベタ基礎は用水路として生まれ変わることができる。取排水の分離や転換畑用の排水路など農業用水路としての利用だけでも価値はあるが、子や孫たちはどのようにつかうだろうか。

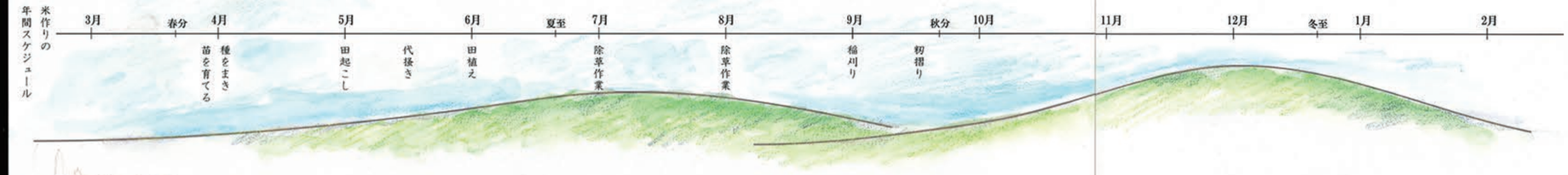


ベタ基礎用水路変換の断面イメージ

秋の夕方2階より山々を眺める

四季が身体に染み込みいつしか原風景となる。
連なる屋根の下でたくさんの原風景が生まれることを期待する。

米作りの年間スケジュール



各家庭の個性と農の風景が「みち」ににじみ出し連なる。